

# 山形県飛島の津波堆積層と遺跡との関係—特に考古学的な視点から—

相原淳一<sup>(1)</sup>・駒木野智寛<sup>(2)</sup>・大畑雅彦<sup>(3)</sup>

(1)東北歴史博物館(2)東北大学理学部・院(3)東北大学理学部・学

## § 1. はじめに

山形県酒田市飛島の古津波調査は平川一臣によって行われ、その調査成果は2013年2月の第2回「日本海における大規模地震に関する調査検討会」において示された(平川2013)。相原はその津波堆積層中出土遺物の年代特定について依頼を受け、調査に関わった。3月には筆者らによる第2次調査、5月には平川・阿部明彦・矢口裕之とともに第3次調査を行っている。

## § 2. 研究成果

### 2.1 飛島西海岸遺跡について

飛島は山形県酒田港から39kmの山形県最北の日本海に位置する面積2.3km<sup>2</sup>、周囲10.2kmの小島である。これまでの考古学的な調査成果によると、縄文時代早期中葉以降、断続的に生活が営まれたことや北陸や北部東北の異系統土器が出土することが明らかにされている。一方、縄文時代晩期末葉から8世紀にかけての遺跡や遺物は確認されず<sup>(註1)</sup>、古代では9世紀前後と10世紀前後の骨が出土した東海岸のテキ穴洞穴遺跡が知られている。



第1図 飛島西海岸遺跡の位置(国土院「電子国土」から作成)

今回発見の飛島西海岸遺跡は古代の製塩を主とする総延長2.5kmにも及ぶ大規模な遺跡である(相原ほか2013)。

### 2.2 調査の方法

調査は海食崖の露頭を中心に精査した。遺構等が確認された場合に限り、上層から10cm幅ほどで掘り下げその形状や堆積土の状況、遺物の有無を確認した。津波堆積物の認定にあたって有効とされる珪藻分析や硫化物分析あるいは粒度分析は行っておらず、すべて肉眼の観察に基づくものである。

### 2.3 基本層序と遺構・遺物の関係

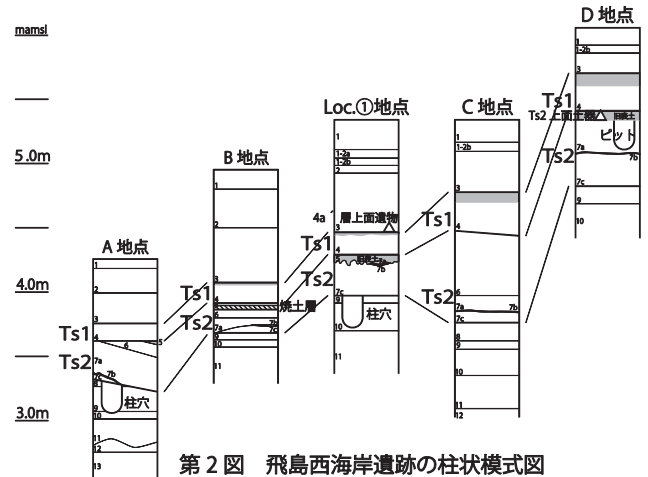
1層/表土~13層/海成の基盤層に大別される。1層:黒褐色表土。2層:暗褐色砂質シルト。3層:黄褐色砂層(崖錐性堆積物)。

4層:黒色砂質シルト。拳大の扁平礫を含む津波堆積層(Ts1)である。層中には円磨された粗砂~細砂を主とし、貝殻や製塩土器の微小片が含まれている。出土遺物はいずれも散漫でまとまりがない。4層上部には旧表土が形成され、Loc.①地点ではその上層(4a層上面)から遺物がまとまって確認された。

5層:黒色シルト。旧表土。地点によってTs1に浸食されている箇所とTs1がそのまま上部に堆積している箇所が見られた。本層直下からB地点では焼土層と製塩土器、D地点ではピットと製塩土器が確認された。

6層:黒色砂質シルト。7層:暗褐色砂層。ともに拳大~人頭大の扁平礫を含む津波堆積層(Ts2)である。6層は6a~6d層、7層は7a~7c層に細別され、特に炭化物を多く含む薄層7b層は調査地点すべてにおいて認められた鍵層である。層中からの出土遺物はいずれも散漫でまとまりがない。

Ts2の直下からは柱穴が検出された。Loc.①地点の柱の抜き穴中には製塩土器が一括廃棄されていた。8層以下では遺構・遺物ともに確認されない。



第2図 飛島西海岸遺跡の柱状模式図

### 2.4 津波堆積層の年代

#### 2.4.1 Ts1の年代

Ts1の層群の上位から遺物包含層(4a層)が検出され、その上面から良好な状態で遺物がまとまって出土した。このうち須恵器坏は山形県酒田市山海窯跡第3窯跡出土資料に類似しており、9世紀第3四半期に位置づけられる。この年代がTs1の上限年代と考えられる。Ts1は『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』に記される嘉祥3年(850)10月に発生した「出羽国嘉祥庄内地震」に伴う津波堆積層と考えられる。

#### 2.4.2 Ts2の年代

Ts2の層群の上面からは焼土層やピット、製塩土器のまとまり、あるいはその直下から柱穴や一括廃棄された製塩土器が検出された。ただし、これらの遺物から年代を特定することはできない。Ts2層中で最も新しい遺物はB地点の須恵器碗と土師器タタキ甕である。須恵器碗は山形県酒田市願瀬山第1号窯に類似しており、9世紀第1四半期に位置づけられるものである。土師器タタキ甕の円形アテ痕は9世紀前葉の特徴とされており、これらの年代がTs2の年代と考えられる。Ts2は『類聚国史』に記される天長3年(830)正月に発生した「出羽国秋田天長地震」に伴う津波堆積層であると考えられる。

## § 3 おわりに

飛島西海岸製塩遺跡は、佐渡西海岸製塩遺跡群に立地もよく似ており、佐渡国同様、東国経営のために国家的に開発された製塩地と考えられる。嘉祥3年の津波以降、復旧された形跡はない。本土側の鼠ヶ関遺跡(9世紀末~11世紀)は県境を越えて府屋まで及ぶ約5,500m<sup>2</sup>もの大規模製塩遺跡であり、その規模と存続年代から飛島西海岸遺跡の後継遺跡と考えられよう。

### 註

(1)対岸の東島海山の山体崩壊と岩屑なだれ(由利高原、象潟方面)の年代が、年輪年代学の成果からBC466年とされており、飛島においても何らかの大規模自然災害あるいは生活環境の激変が想定される。その解明に関しては、今後の課題である。

### 引用参考文献

相原淳一・駒木野智寛・大畑雅彦 2013 「山形県酒田市飛島西海岸製塩遺跡の調査」『山形考古』10-1(通巻43号) pp.346-374 山形考古学会  
平川一臣 2013 「日本海東縁の津波堆積物古津波履歴」(資料-3) 第2回日本海における大規模地震に関する調査検討会 国土交通省